
異世界動物園

岸田四季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界動物園

【Nコード】

N1565L

【作者名】

岸田四季

【あらすじ】

「それと今日やってもらう仕事だけど……Eランクの野生の魔王の捕獲です」それは突然だった。そして俺は知った。日常とはこうも簡単に崩れるのだと。

季節は冬。

寒空の中、俺は家へ向かって住宅街を歩いてた。周りには人は誰もおらず、一人寂しく帰っていると、電柱にバイト募集の張り紙を見つけた。ちょうど先日バイトを辞めたばかりだったので、何気なく張り紙の内容を読んでみる。

動物園で働きたい人募集！

条件

・珍しい動物が好き人

確かに珍しい動物は好きだ。イリオモテヤマネコとかウミネコとか……。

・RPGやライトノベルやアニメや漫画が好きな人（特にファンタジーもの）

RPGはやらない日がないと言っていいくらいやりまくってるな。ラノベ、アニメ、マンガって嫌いな奴いるのか？

・死んでも問題ない人

例：高校生くらいでRPG好きとか言って男で一七〇センチ身長な
い奴

ん？ 俺は高校生でRPGが好きで身長は……一六七センチだ。

……………

俺は辺りを見渡す。よし……誰もいない。

「一〇〇%俺のことだああ！」

よしスッキリした。なんて失礼な広告だ。でもこれはこれで気になるな。

俺は地図に書かれた事務所に向かうことにした。ここまで当たってると逆に気になるしね。

徒歩で十分くらいかかっただろうか。ようやく広告に書かれた場所までたどり着いた。ここは自宅近くの駅から少し外れたところに

あり、辺りはほとんど何もない。空き地、と言えばいいのだろうか。どうぞ通ってくださいと言わんばかりの手抜き満載のロープがしてあり、その奥には何に使うのか分からないドラム缶や雨水が溜まり臭そうなタイヤが雑草の上に不法投棄されているだけ。文字通り何もない。

お陰でここまで迷わず来れた。空き地だらけの地域にポツンとオンボロの二階建ての事務所を構えていれば、この辺りを少しでも知っている人ならまず迷わない。

つか、動物園の事務所だよな？ この辺りに動物園なんかあったっけ？ 辺りを見渡してもそれらしきものは見つからない。それどころか猫一匹見つからない。当たり前か。ここはどっちかかっていうと都会の部類に入るしな。

俺は階段を上る。なぜか二階だ。一階はどこか別の会社が使っているのか知らないが、地図には二階と書いてあった。

コンコン

「失礼します」

ドアをノックし扉を開けると……誰もいない？ あるのは事務所によくあるような灰色の机が二つとキヤスター付きの簡単な椅子が机と同じ数、来客向け用なのか変色しスポンジが飛び出ている座るのをためらってしまうほど汚い二人掛けのソファが一つ。これまた事務所にありそうな灰色の棚が二つほど置いてある。壁にかかった時計は午後五時半を越えようとしていた。

「すみませーん。どなたかいらっしやいませんか？」

大きな声で人を読んでみるが返事は返ってこない。

「誰もいないのか」

振りかえりドアを開けようとした瞬間、後ろからまるで大きな何かが落ちて来たような物音が聞こえた。俺はビクリして振り向く。……前言撤回。まるで大きな何かが落ちて来たような物音ではなく、太ったおっさんが机の上に落ちて来た音だ。

「いやいや、遅れてすまないね」

追記：禿げてます。

禿げて太ったおっさんは白いワイシャツに赤いネクタイに黒いズボンというなんともだらしない格好で机の上に座り、辛うじて焼け野原にはならなかった頭を掻きながら謝ってくる。シュールだ。堪える。笑ったら負けだ。

「いえいえ、僕も今来たところですし」

一応マナーとして「俺」ではなく「僕」と一人称を変える。俺なんて言ったら一発で不採用になっちゃうからね。

「汚いところだけどゆっくりして行って。あ、そのソファ自由に使っていいよ」

ハゲデブ（面倒なので省略）は例の座るのをためらってしまうほど汚いソファを指差す。いや、アレを客人に座らせる訳がない。どっからソファを持つてくるのか？

「どうしたんだい？ そこにずっと立っていたら面接が出来ないじゃないか」

ハゲデブはキャスター付きの椅子をソファの近くまでコロコロと転がして移動させてきた。

「あ、はい。……有り難く座らせていただきます……」

薄々感づいていたさ。ソファを持つてくるなんてありえない。仕方ない、座るか。いや待てよ。空気椅子なら……イケる！

「えーと、では……今日は動物園の面接ってことでもいいのかね？」

「は、はい。だだだだ、大丈夫です」

早くも足がプルプルして来た。座っていると見せかけて五ミリほど浮かせるのは至難の業だ。おそらく生涯でこれをする機会は二度とないだろう。

「……君、何やってるの？」

「……すみませんでした」

ようやく空気椅子から解放された。正直あそこからどうしようか迷っていたのでちょうどよかった。

「では、面接を始めます。履歴書ってある？」

……………そうだ。面接には履歴書が必要だった。クソ、どうやって言い訳するか………ここは無難に忘れましたがいいだろう。

「………すみません。家に忘れてきちゃいました」

申し訳なさそうな顔をして、反省をアピールする。ま、嘘だけだね。

「あ、いいいいいよ。うちは基本的に必要ないんで」

ハゲデブはニコニコしている。なんかムカついてきたがとりあえず会釈をしておく。これで印象悪くしたら面倒だしな。

「じゃあ、携帯の番号がなんか教えてくれる？ 連絡とれないと不便だからね」

そう言っつてメモ帳とワイシャツのポケットに刺さっていたボールペンをこちらに寄こす。その仕草がまたムカついた。理由はないけど。

俺は名前と住所と自分の携帯番号を書いてハゲデブにメモ帳を返す。

「ありがとね」

ハゲデブはメモ帳を受け取り、内容を確認する。近眼なのか、メモ帳にかなり顔を近づけている。多分距離は三センチくらい。

「読み方は犬飼憲太君であってる？」

「あ、はい」

「じゃ、犬飼君って呼ばせてもらおうか」

ハゲデブはメモ帳をすぐに机の上に置いた。

「それでは早速仕事をしてもらいます」

「え？ 合格なんですか？」

「そりゃもちろん合格だよ」

何がもちろんなのか分からないが、どうやら俺は合格したらしい。死んでもいい奴と判断されたのかもしれない。

あまり理解はしていないが、これから働いていくのに困るので動物園の場所を聞いてみた。

「あーそれね。今度連れてってあげるから心配いらないよ。それよ

り今から二、三時間くらい時間あるかい？ 早速働いてもらいたいんだが……」

ハゲデブは困った顔をしてる。どうやら本当に急ぎの用事らしい。今から二、三時間っていうと、帰るのは七時か八時くらいか……ま、仕方ないか。

「分かりました。今日は何の仕事なんですか？ あ、あと時給とかって……」

いきなりお金の話をするのは失礼かと思い語尾を濁らす。が、ハゲデブに気にした様子は見えない。

「ああ、うちは時給じゃなくて歩合給だからやってくれた仕事の難易度によって変わるんだよ」

歩合給か……バイトでは珍しいな。つか、難易度ってなんだ？

AランクとかBランクとかあるのか？

「それと今日やってもらう仕事だけど……」

不自然に間が空く。いや、緊張していてそう感じるだけかもしれない。俺はハゲデブの口から出る言葉を待つ。

「Eランクの野生の魔王の捕獲です」

「へ？」

「いやだから、Eランクの野生の魔王の捕獲だって。Eランクだからそんなに心配はいらないよ」

「すみません。魔王ってなんですか？ そんな動物いましたっけ？」

マオウ、マ・オウ、マールオウ、マールオーウ、M・A・O・U……

…どう変換してもそんな動物は知らない。やっぱりハゲデブの言うてる「マオウ」は「魔王」だよな？

「あれ？ RPGとかやったことないの？」

「いや、やったことありますけど……魔王って魔王ですか？」

「君の言ってる魔王が何かは分かんが、魔王は魔王だ」

終わった。バカに捕まってしまった。考えてみればあの広告からおかしい。RPG好きの人を募集なんて意味が分からない。だが仕方ない。ここまで来てしまった俺の責任でもある。少し付き合っ

やるか。

「それで魔王は実在するんですか？ どこにいるんですか？ どんな姿なんですか？」

俺は様々な質問をぶつける。興味半分、腹いせ半分だ。

「だって、ちよつと古いRPGに魔王とか出てくるでしょ？ あれに出てくるんだからいるに決まってるじゃないか。そうじゃなければゲーム会社は嘘つきになってしまう」

嘘つきとかそういう問題じゃない気がするがここは耐えよう。これでは話が進まない。とりあえず納得しよう。

「……そうですね」

「で、魔王の居場所だけど……これは一概にどこって言えないんだ。RPGやったことある君なら分かると思うけど、世界によって魔王がいたりいなかったり。姿も人間だったりドラゴンだったりするでしょ？ だから、入る世界によって魔王は変わってしまう。今日犬飼君が行ってもらった場所は、ドラゴンの姿をした魔王が支配する世界だから、くれぐれも飛んでくる火には気をつけてね。結構熱いか」

「……………」

ここまで来るともはやバカではなく、天才の域まで達している気がする。

「あ、そう言えば自己紹介がまだだったね。私はこの動物園の園長です。もう分かってもらえたと思うけど、珍しい動物を扱った動物園でね、他にもゴーレムなんかもいるんだ」

「へー」

もう無理だね。このコメントしか出て来ない。

「じゃあ、そこに立って。これから異世界に転移するから」

ハゲデブ改め園長は、謎の円が書かれている床を指す。多分魔法陣だろう。

あーもうどうでもいいや。こうなったらとことん付き合ってやるう。

「魔王を捕獲するのはいいですけど、武器とかないんですか？ 捕獲と言っても素手ではきついですよ？」

俺は魔法陣らしき円が書かれた場所まで移動する。

「ああ、それなら心配いらないよ。向こうに着いたらミリアさんがいるからね。後のことは全部ミリアさんに聞いた方がいいよ」

園長は俺に向かって両手をかざす。

「じゃ今から飛ばすから気をつけてね」

「すみません。何を気をつけたらいいか分からないんですが」

「そこは…… テキトーだよテキトー」

テキトーの意味をかなり履き違えている気がする。 テキトーはそんなに便利な言葉じゃないぞ。

「じゃ始めるよ…… ふんッ！」

園長がそう言うつと足元にある魔法陣が輝き始めた。そして、段々と視界が霧のような白で埋め尽くされた。

視界がようやく晴れると、すぐに大自然が飛び込んできた。無限に広がっているじゃないかと錯覚してしまう緑の草原、草原を彩るように茂る緑の葉が付いた木々、草原の至る所に顔を出す小さな花、周囲を囲む山々、そして、空を見上げると雲一つない青天が広がっていた。

「すげえ…… こんな綺麗なとこ来たの始めてだ……」

辺りを見渡しているとあることに気が付く。

「もしかして…… 本当に異世界に来たの？」

俺は必死に記憶を辿る。園長が両手をかざし、魔法陣らしきものを光らせた途端、ここにいた…… 気がする。

「ったく。園長は相変わらず転移が下手くそだな」

背後から女性の声がする。何だ？ 振り向くと…… 誰もいない？ 「おい、どこを見ているんだ。こっちだこっち」

ん？ なんだか下から声がするような…… そして俺は見た。地面

に刺さっている西洋風の剣を。

「剣？」

「バカ者！ 違うわ。私はミリア。インテリジェンス・ソードだ」
インテリア？

「インテリア・ソード？ インテリア…… ああ、あれね。部屋とかに飾るヤツね。最近のは喋るのかあ。凄い機能だな」

「バカか貴様は！ インテリアじゃない。インテリジェンスだ。インテリジェンス・ソードは喋る剣の総称だ。そんなことも知らないのか、今回の新人は」

なんか剣に怒られるというのは不思議な気分になる。なんて言えばいいんだろう。ああ、あれだ。言葉を覚えただかりの小さい子が「コラ！」とか、お母さんの真似をして怒るのに近いな。あれって不思議な気分になるよね？ どう反応すればいいのか迷うし。

「バカの常識を押しつけられても分かる訳ないだろ。そもそもここはどこなんだ。北海道か？」

剣がため息をつく。

「貴様まだここが貴様の住んでいる世界だと思っているのか？ 相当な馬鹿だな」

剣に呆れられるとなんかムカつくな。しょうがない。知らないところに来ちゃったし、ここはこの剣に頼るしかないな。

「剣。それで、何すればいいんだ？」

どういう仕組みで喋っているのかさっぱり分からないが、何か知ってそうだから尋ねてみる。

剣は呆れたように、

「…… 貴様、いい加減口のきき方を覚えろ！ 私は剣ではなく『ミリア』だ。ミリアさんと呼べ」

「なんでたかが剣なんかを……」

周囲の草がバツサリと斬り落とされる。こいつ……動けるのか？

「次は腕の一本や二本、覚悟しておけ」

背中に寒いものが走る。それと同時に体がどんどん震えてくる。

どうやら俺の体は正直者のいい奴らしい。

こえええええ。

「す、すみませんでした。ミリアさん」

「ったく、園長が転移場所間違えたからわざわざ追いかけて来てやったのに……この無礼者が！」

「も、申し訳ありませんでした」

同時に頭を下げる。周りには俺の姿がどう映っているんだろう。

剣に謝ってる奴って……かなり危ない人だよね？ あ、でも周りに人がいないから平気か。危ないところだったな。

「それで……僕は何をしたらいいのでしょうか？」

したて下手に下手に出る。怒らせたら怖いから。

「園長から聞いていないのか？ 今日野生の魔王の捕獲だろう」
さつきから気になっていたが、『野生』の魔王ってなんだろう？
魔王ってエンカウンとしないよね？ 強制エンカウントだよ？
エンカウントゾーン通ると出てくるよね？ あれ？ 俺、間違ってるのかな……

段々不安になってきたところで剣改めミリアさんが説明をしてくれる。

「この世界はドラゴンの魔王に支配されているってのは聞いたよな？ 普通はどっかに城を構えて勇者を待ち受けるだが、この魔王はちよつと違う。週一で城の場所を変えるんだ。いわば遊牧民型魔王なんだ」

あ、やっぱこいつバカだ。当然ながら口にはしないけどね。

「で、今週の城の場所なんだが……貴様の後ろだ」

「え？」

振りかえると少し離れたところに城？ があった。城壁があり、無駄にトゲトゲしたよくRPGなんかに出てくる普通の城だ。が、一つだけ大きく違うところがあった。それは大きさだ。多分段ボール箱くらいしかない……なんだこれ？

「ミリアさんこれ何ですか？ ハムスターでも住んでいるんですか

「？」

ミリアさんはまたため息をつく。

「だから魔王の城だって言ってるだろ！ 何度言えば分かるんだ！」

「いや、だっておかしいじゃないですか！ これじゃ中に入れませんよ」

俺は必死で反論した。だっておかしいもん。

ミリアさんはまたまたため息をつく。

「貴様は本当に馬鹿だな。入る必要はない。ひっくり返せば出てくるだろ」

「…………… もう魔王じゃないよね？ 本当にこんなのが魔族の王なのか心配になってくる。」

「貴様は勘違いしているな。なんでも自分を中心に考えるな。ここでは貴様のようなサイズの生物の方がよっぽど珍しいのだ。少しは考える。そんなに都合よくサイズが合う訳ないだろ」

「ごもつともです。異世界Ⅱ同じサイズな訳がない。自分が巨人にもなりえるし、小人にもなりえる。少し自己中心的になり過ぎたな。すみませんでした。じゃあ早速仕事始めますね」

「おう、任せたぞ」

俺は段ボールサイズの魔王の城を持ち上げ逆さまにする。だが、

「出てきませんよ？ 留守なんですかね？」

「本当に馬鹿か貴様は。居留守を使っているかもしれないぞ。振ってみろ」

ミリアさんに言われた通り“城”を振ってみる。すると、キューという鳴き声と共に水色の何かが落ちてきた。俺はそれを拾い上げる。大きさは片手に乗るくらいでトカゲと大差ない。しかも羽が二本生えてる。水色のトカゲに羽が生えたような生き物だ。

「これ、なんですか？」

「おお早いな。そいつが魔王だ」

「…………… まずい。あっさり捕獲しちゃった。バトルシーンとかドラマチックな展開が一切なかった。俺としたことが……………」

「じゃあそれをこれに入れろ」

ミリアさんがそう言うのと虚空から鳥かごが出てきた。こんなのでいいのか心配だったが、耐火性は抜群らしい。火を吹いているシーンなんて出て来なかったけど。

「よしこれで今日の仕事はおしまいだ。初めてにしては手際がよかったな。お疲れ、帰ってゆっくり休め」

ミリアさんは魔法陣を俺の足元に書き始めた。

あ……ミリアさんって魔法も使えるんだ。くだらないことを考えているうちに段々視界が白に支配されていった。あ、もう一つ……俺五歩くらいしか動いてないな……

気が付くと面接を受けた汚い事務所にいた。壁にかかった時計が指す時刻は六時三分。あれから三十分程度しか経っていなかった。

「おお犬飼君帰り。早かったね」

園長がキャスター付きの椅子をコロコロと転がしながら近づいて来る。慣れているのか、園長は途中で止まることなく俺の前までやって来る。ちよつとやってみたいと思った俺はおそらく負け組みだろう。

そして園長は懐から封筒を取り出した。

「これ今日の分の給料ね。うちは仕事の度に渡すシステムだから。仕事中に死ぬかもしれないから、こうしないと給料が渡せないんだよ」

凄じい物騒なことを言っていた気がするが気にしない方向で。

「あ、ありがとうございます」

いくら訳の分からない仕事だつとは言え、結構嬉しいものだ。思わず顔が緩んでしまう。

「今回はEランクだったから五万円ね」

五万？ あのとカゲみたいなのを捕まえるだけで五万円なんて……俺このバイト好きかも！

俺はすぐにそこから出た。おそらく二度と来ないであろう事務所を。だが、また来てしまう、そんな予感もしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1565/>

異世界動物園

2011年3月22日21時55分発行